

迎賓館の見学 2024

旅のチカラ研究所

2024年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

9月のある暑い日、私は旅友たちと東京赤坂の迎賓館を見学してきた。あまりの感動したので記録に残す意味で旅行記を書いた。その後に食べた深川丼も実に美味しかった。

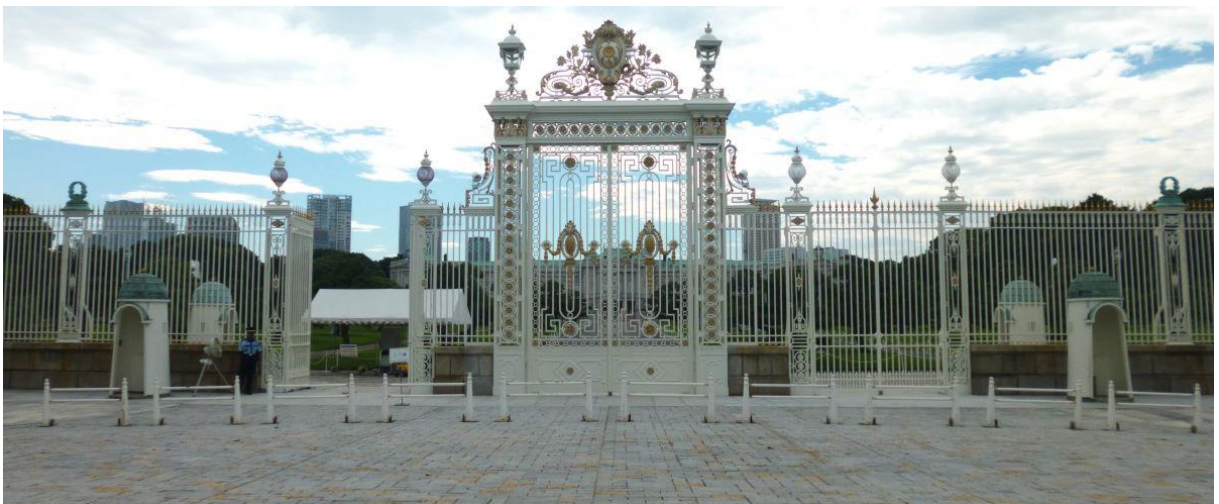
■迎賓館に行く

東京赤坂に外国からの賓客を迎えるための豪華な迎賓館がある。もちろん日本政府が所有する施設で、そんな施設があることは知っていても一般人が内部を見学できることを知っている人は意外に少ない。

私はこの豪華な施設を見学に行くために、旅友たちを誘った。季節は秋の彼岸前と言うのに残暑が厳しい日になっている。

四谷駅で待ち合わせてから南に歩いていくと、柵と門があって、その向こうに広い敷地が広がり迎賓館が見えてくる。

前庭の奥に洋風建築の立派な本館が見える。事前に調べた情報では、その本館の横に和風別館、本館の奥に主庭がある。



【迎賓館正門】

見学者は、西門から中に入ることになっているから、正面からの記念撮影を早々に切り上げて西門に向かう。

入門のチェックが厳しい。空港に置いてあるようなX線検査や持ち物検査があり、ペットボトルは持ち込めるが、その場で口をつけて無害を証明しないと行けない。

さらに驚くことは、建物内を見学中は飲食禁止で水を飲むことも禁じられている。その理由は見学者が利用できるトイレがないという事情らしい。

受付場所でトイレを済ませて水分補給もしておかないといけない。さらに建物内部は全て撮影禁止になっている。

入場料が必要で、見学する施設によっては事前予約が必要な場所もある。



【迎賓館のパンプレットの見取り図】

■和風別館

和風別館の見学は20人が1グループになって、専門の女性スタッフが案内してくれる。見学者はその彼女に付いてまわる訳だが、背後からも制服を着た剛腕らしい制服姿の警備員も付いてくる。人数のチェックや、そして変なことをしないように監視する役目らしい。

和風別館の内部は撮影禁止と言われていたが、和風別館に行く途中も屋外なのに撮影禁止になっている。案内役の彼女は「隣の敷地は赤坂御用地ですので、私たちも近づけないのですよ」と言っている。

門をくぐると、坪庭が出迎えてくれる。坪庭と言っても結構な広さをしている。

日本庭園で良く使われる小石で水を表現する枯山水（かれさんすい）と呼ばれる技法が使われており、坪庭の向こうには竹林が広がっている。もちろん十分に手入れが行き届いている。

案内役の説明では、当初は島に見たてた大きな石はなかったが、群馬県出身のある総理大臣が石を置いた方が良いという一言で後から置かれたという。

権力者とはこんなことにまで口を出し、それを忖度して実行する国家公務員の性（さが）を感じてしまう。

ここからは狭い通路を歩くのでカバンなどが壁に当たって壁を傷つけないようにと、前に抱えるように言われる。もちろん壁や戸にも一切触ってはいけない。

手すりがないので、手すり代わりに柱を持とうとした年配のご婦人がいたが、警備員から即座に注意される。

外は残暑厳しい暑さだったが、中はひんやりとしており空調が行き届いている。別世界というのはこういうことを言うのだろう。

中庭の前に出てくると池があり、庭に出られる。屋外の撮影は許されるので、みな一斉に撮影を始める。



【和風別館と池】



【和風別館の前の庭】

建物の内部からもその池がよく見え、鯉がたくさん泳いでいる。この池は当初の設計では水深が 50cm 程なので、鯉を泳がせる深さではなかったが、新潟出身のある総理大臣が鯉を泳がせてはどうかと言ったので、水深 1m に改修され鯉が放たれたという。

池の水に太陽光が反射して建物の壁や軒、さらに室内の天井に映し出されている。これを案内役の彼女は“ゆらぎ”とかいう表現をしていたが、調べてみると“水影”と呼ばれるらしい。

季節によって太陽の高さが変わるために光の入射角度も変わり、水影の現れる範囲も変わる。

今は夏で、水影は池に近い天井までだが、冬は部屋の奥まで広がってくるのが特徴だとも言って、その冬の水影の写真を見せてくれる。確かに奥の方まで池の水面に反射した太陽光が揺らいで映し出されている。

設計者はそこまで考えて設計したというから、建築の奥深さや面白さが伝わってくる。

水影が映る天井の広間は、47畳敷きの和の空間で、和食で賓客をもてなすことができる。外国からの賓客なので全て掘ごたつようになっており足を伸ばせる。

茶室もあって、お茶を立てる場所以外の賓客が待つ席は椅子席になっている。単に古い和の様式やしきたりにこだわっておらず、“おもてなし”にこだわっている。

■本館

本館はコンクリート造りの豪華な洋風建築で、1909年に天皇の東宮御所として建てられた。そのため豪華な上に堅牢にできており、関東大震災でもびくともしなかったという。その豪華堅牢の建物を1974年に改装して迎賓館にした。

先ほど見学した和風別館はその時に新築されたという。

本館の見学には案内人はおらず、自由に見学できる。ただし至るところに制服姿の監視員がおり、撮影と飲食はもちろん、壁に触れることもできない。広い廊下なのに見学者が通れる範囲は狭く規制されている。ゴミひとつないのは当たり前で、汚れやシミも全くない。いつ賓客を迎えていいように、最高の状態が維持されている。

本館はフランスのベルサイユ宮殿のような造りになっている。とにかく豪華絢爛で、これが日本かとも思えない。

旅友たちは「これだけのものが国内にあると思わなかった」とか、「これなら海外旅行に行く必要ないかもしれない」などと言っている。



【正面横から見た本館】

シャンデリア、暖炉などの装飾品の多くは主にフランスから輸入したものだが、そこに日本風の要素を加えている。例えば正面玄関の上の彫刻は日本の武者の鎧をかたどっており、室内には日本刀とサーベルをかたどった装飾もある。これらはフランスに行っても絶対にお目にかかれな
いだろう。

残念ながら写真撮影が禁じられており写真は撮れないが、パンフレットには以下のような写真が載っている。



【日本の武者の鎧をかたどって彫刻】



【日本刀とサーベルをかたどった装飾】

■庭園

正門と本館の間にある庭は前庭と呼ばれており、かなり広い。おそらく敷地の半分くらいを占めている。本館の前には石畳の広場があり、パラソルとテーブル、そしてキッチンカーも出ている。もちろん日本政府が認可したキッチンカーだろう。

この素晴らしい本館を前にして、ゆったりくつろげる空間を演出している。この場所に入場するだけならば入場料 300 円で予約の必要もないので、何組かの人たちが優雅にテアタイムを楽しんでいる。



【本館の前庭】

そういえば和風別館へ行く途中でこの本館前の石畳を歩いたが、案内役の彼女はこの石畳についてこう説明していた。

イギリスのエリザベス女王が来日する前にイギリス王室の先遣隊が迎賓館を訪れて、この石畳について問題を指摘してきたという。それは女王がここを歩く時にハイヒールを履いているのでヒールが石と石の間に挟まってしまうことで、改善要望が出されたという。そこで迎賓館の対応は石と石の間の溝を女王が歩く範囲で埋めたという。確かに中央付近は石畳の石と石の間をコンクリートで埋めた跡が残っている。究極のおもてなしを見たような気がするが、私にとってはそこまでやるのかという思いの方が強い。

正面から見れば本館の奥、つまり裏に主庭がある。そこには古くて立派な噴水がある。1909年に天皇の東宮御所として建てられた時の噴水で、100年以上経っている。この噴水から本館を見て写真を撮ると、写真には国宝が2つ写っていることになる。ひとつは噴水、もうひとつは本館で、どちらも別々に国宝に指定されている。



【主庭の噴水と本館】

それにしても主庭といっても噴水しかない。いくら国宝とはいえ主庭と呼ぶには無理があるような気がする。確かベルサイユ宮殿は宮殿の奥にある主庭が非常に広がった。そのベルサイユ宮殿を模したにしてはどうも解せない。

しばし考えて地図をみると何となくその理由が判明する。実はこの先は赤坂御用地になっており、迎賓館の前身の東宮御所ができた当時は、噴水の奥に広がる赤坂御用地を主庭としていたのだろう。

■偶然と感動

和風別館、本館、そして庭園を観てその素晴らしさに感動すると同時に、なぜ私はこれまでここに来なかったのだろうかと後悔するばかりだ。

和風別館は日本文化を外国の賓客に伝えるための和の趣が随所に感じられる。本館と庭園は日本に居ながらにしてフランスなどのヨーロッパ文化に触れることができ、細部ではヨーロッパ文化に日本らしさを加えたものを見ることができる。

私の持論で「偶然と感動」というものがある。現地に行って事前の予想を超えた時、つまり偶然に近いほど大きな感動が生まれる。

逆に美しい写真や映像を見て期待をして行くと、それを裏切る結果になることが多々あり、これが「期待と落胆」と呼んでいる。

旅にこの2つが混在しており、今回の見学は完全に「偶然と感動」だった。

■深川井

私は以前から深川井を食べたいと思っており、その機会をうかがっていた。そして今回の迎賓館見学の後、古き良き江戸文化に触れるのも良からうと深川井を食べに行くことになる。

江戸時代、東京湾には多くの干潟があり貝類の宝庫だった。現在の江東区付近は深川浦と呼ばれて潮が引くと砂州が広がり、アサリやハマグリなどが豊富に獲れる漁師町だった。そんな環境から深川井（深川めし）が生まれた。

深川井は、元々はネギと生アサリを味噌で煮て汁ごとご飯にかけてのものらしいが、現在はそのような汁ごとかけた井と、炊き込みご飯の2種類があるようで、私が調べた限りでは汁ごとかけた井を深川井、炊き込みご飯を深川めしと称するのが一般的らしい。

■釜匠

私たちは赤坂から移動し、清澄白河駅の「釜匠」という深川井の店に入る。幸いにしてこの店には深川井と深川めしの両方が小どんぶりで食べられる「深川セット」があり、もちろんそれを注文する。

9月とはいえ残暑がきびしく、何はともあれビールで乾杯する。



【釜匠の深川セット 左が深川めし、右が深川井】

出てきた深川丼には卵黄が2つも載っている。もちろん温かいので冷めないうちにこちらを先にいただく。アサリの味がぎゅっと詰まった煮汁にアサリ、ご飯、油揚げが入ってネギが上に載っている。特出すべきはアサリの量で、相当な数のアサリが入っている。

これだけのアサリが入っているので、美味いに決まっているが、卵黄と一緒に食べるとこれがまた美味しい。

深川めしもアサリの量が半端ではない。そのアサリの出汁が良く出ていて、こちらも美味しい。炊き込みなので焦げた部分がまた美味しい。

これは個人的な問題だが、私はどちらかというとお茶漬けのような感覚で食べる深川丼の方が好みかもしれない。

いずれにしてもかなりのボリュームで、小どんぶりとはいえ、超が付く満腹感と満足感を味わうことになった。

同行の旅友たちも「美味しい、美味しい」と言いながら、手を止めないで食べ続けている。誰かが「迎賓館と深川丼、こんな素晴らしいもの何で今まで体験してこなかったのだろうか」と言っている。

これもまた、偶然と感動かもしれない。

■旅の記録

実施は2024年9月20（金）の日帰り旅の行程を示す。

10時30分に四谷駅で待ち合わせ、10時50分に「迎賓館」に入門し、11時30分から約1時間スタック同行の和風別館の見学ツアー、本館と庭園を見学して14時に出門、電車で移動して15時に清澄白河の「釜匠」で食事、その後は門前仲町の「845（はしご）」で打ち上げ、解散。

費用は迎賓館入場料2000円、釜匠の食事とビールで3000円、打ち上げ2000円、そして交通費が約2000円かかった。